医再発見

在宅医療 3

かかりつけの薬局・薬剤師持って

皆さんは、かかりつけの薬局や薬剤師をお持ちでしょうか。

高齢になると、いくつもの病気にかかってしまうことが少なくありません。内科と整形外科など、病気ごとにいくつもの科にかかっていたり、別の病院やクリニックを受診したりして、それぞれで薬を処方されることがあります。同じ効果や似た効果の薬が同時にいくつも処方されてしまったり、飲み合わせがよくなかったりするリスクが生じます。

薬の数が増えると、飲み忘れの危険性も高まります。加齢によって腎臓や肝臓の働きが衰えることで、薬の効果に変化が起こり、効きすぎたり、副作用が出てしまったりすることも考えられます。視力や聴力の低下、のみ込む力や認知機能の障害などにより、薬の管理や服薬そのものに支援が必要になることも少なくありません。

県薬剤師会理事

小田 真稔さん（37）

患者さんの病気への向き合い方も異なります。病気を積極的に治したいのか、それとも終末期などでなるべく痛みをとりたいのかなど希望によって必要な薬は違ってきます。高齢化が進むなか、こうした個人差に応じた調剤や服薬の管理を適切にする上で、私たち薬剤師の役割が非常に大きくなってきていると実感しています。

特に自宅で過ごしながら治療を受ける在宅医療では、入院に比べて医師や看護師と顔を合わせる頻度がどうしても少なくなります。病院なら看護師が飲み忘れないようにチェックしていますが、在宅医療で自宅を訪問すると、薬が机にそのまま置かれているということがよくあります。これでは病気を治せなかったり、痛みや苦しみをとれなかったりします。

このように、薬は患者さんの生活に極めて重要であるにもかかわらず、これまで薬剤師は、どちらかというと医療や介護の場面で役割が見えにくかったのではないでしょうか。しかし、外来や入院から在宅、終末期に至るまで、私たち薬剤師は唯一の薬の専門家なのですから、医師や歯科医師、看護師といった多くの職種の方々とさらに連携していかなければなりません。

病院から退院する際の話し合いや、在宅医療に向けてケアマネジャーらが計画を練る会議に薬剤師が参加し、患者さんの病状や希望を知っていれば、より効果的な薬の組み合わせや飲み方を提案できます。朝昼晩で飲む薬をまとめ、袋に日付を書いて飲み忘れないようにしたり、湿布やガーゼといった材料を供給したりすることもできます。

患者さんが薬を安全で安心して使えるよう、私たち薬剤師は、薬の一元的な管理や供給に努めています。みなさんも、在宅医療や療養はもちろん、普段から顔の分かるかかりつけの薬局や薬剤師をお持ちいただければと思います。

福岡大、同大学院卒。同大薬学部講師を経て薬局経営「オダファーマシー」社長。薬剤師として上富野調剤薬局（北九州市）勤務

131204